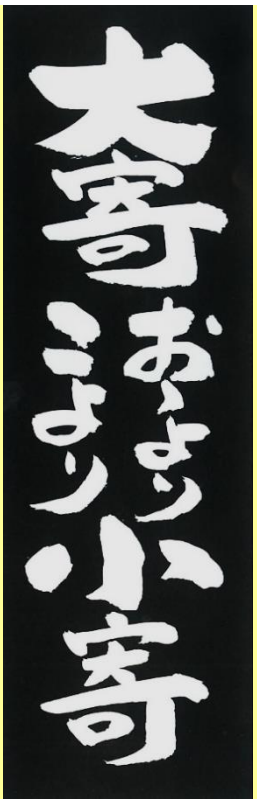

真宗大谷派（東本願寺）
小松教務所
〒923－0904
小松市小馬出町２６
Tel　0761-22-0555
発行者　保木　悦雄
編集　小松教区教化委員会

お同行さん

～あなたの隣の門徒さん～

「新たなお講を開きたい」

小松市今江町　田端　利明さん（69）

コロナ禍によって聞法の機会が失われている昨今「新たなお講を開きたい」と語る小松市今江町の田端利明さんにお話をうかがった。

「とある御消息の存在を知ったことが、お講を開きたいと思ったきっかけのひとつです」と田端さんは語ってくれた。その御消息を14年間にわたり預かっておられるのが、田端さんと同じ町内でお米屋さんを営む戸井幸則さんだ。

大正9年にお米屋さんだけで結成された米屋講が生まれ、23代彰如上人から御消息をいただいたという。御消息は講員の家々を回りお講が開かれていたが、時代の流れとともにお米屋さんは減り、最後に場が開かれたのは14年前になるそうだ。

戸井さんから御消息にまつわるお話を聞いた田端さんは「せっかくご本山からいただいた御消息が眠ったままなのは忍びない。新たなお講を開き、可能であれば御消息を相続したい」と思ったそうだ。田端さんのいに対して戸井さんは「講員が減って場を開くのが難しくなっている今、田端さんのような熱心な人が相続したいと言ってくれるのは有り難いです。講員の皆さんと相談したいと思っています」と語られた。

田端さんにお講の詳細についてお聞きしたところ「戸井さんをはじめ、よく一緒に聞法している7～8人で集まれたらと思っています。小寄りを作りたいですね」とのことだった。

多くの場が中止・延期の今だからこそ「新たなお講」という言葉から前向きな気持ちをいただく取材となった。

御消息を手にする田端さん（左）
戸井さん（右）

小松教区 帰敬式 ～おかみそり～

２０２１年９月３０日（木）

午前受式　9:00～11:30　　午後受式　13:15～15:45

各回定員50名　受式冥加金13,000円（記念品代含む）

7月30日（金）までに教務所へお申し込み下さい

対談 真宗本廟収骨

（しんしゅうほんびょうしゅうこつ）

本山本廟部長　近松誉（ちかまつただし）
小松教区教務所長　保木悦雄（もつぎえつお）
小松教区広報部門　山内譲

毎年、真宗門徒の多くが本山である真宗本廟への収骨を行ってきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大で京都まで行くことが困難になり、小松教区では昨年9月から収骨代行を実施しています。これを機に「収骨の意義と、私たち真宗門徒にとって真宗本廟とは何か？」ということを改めて確かめてみたいと思います。本山の近松部長と保木教務所長にお話を伺いました。なお、対談は感染拡大防止のためオンラインで行いました。

山内　近松部長にはお忙しい中、時間を作っていただきありがとうございます。まず収骨の歴史についてお話いただけますか。

近松　本廟収骨についてお話するには、まず「相続講」のことに触れる必要があります。蓮如上人の頃にはじまります「講」、つまり信心を同じくするあつまりという意味の「講」が明治時代になりまして相続講ということで再編されていくわけです。それは元治元年（１８６４）に東本願寺の両堂が４度目の焼失にあいまして、その後明治12年（１８７９）に現在の両堂の起工式を迎えるわけですけれども、幕末から明治にかけて廃仏毀釈などいろいろな苦労がありました。その財政の苦しい中でなんとか再建にこぎつけたいのですが、なかなか懇志が集まらないということがあったわけです。

その中で明治18年、法義相続・本廟護持ということを掲げて相続講が始まったということがありました。

本廟護持とありますけども、これはまず法義相続ということがあるわけです。親鸞聖人の教えを後の世に伝えるということがあって、そのための本廟の再建及び護持であると。そのことに力を貸して欲しいということを、当時の宗主厳如上人が相続講をつくるにあたっての『趣意書』で述べられています。

そういう中で全国に小会というものが作られて、皆様のご懇志を集めていただくということが始まりになるわけです。その賞典、お礼ということで収骨が始まったということです。明確に賞典として収骨が始まったのは明治44年（１９１１）。これは宗祖の六五〇回御遠忌といわれています。そして大正十年代の相続講の規約にはこの収骨について付記されています。

ですからまず法義相続ということがあって、その趣旨に応じてくださった皆さん、ご懇念・ご懇志を渡してくださった方への賞典・お礼ですね、そういうことでこの収骨が始まったということです。

やはりそこには浄土真宗の教えを後世へ伝えていきたいというひとつの大きな願いがあり、その中で真宗本廟というものを改めて教えの中心に据えていくということですね。ですから、本廟が教えを守り伝えていく場所であるということです。そういうと

本山本廟部長　近松　誉氏

ころを皆さんで大事にして確かめ合っていこうということです。

山内　よくわかりました。ところで、以前は須弥壇収骨と言っていたと思います。こちらに馴染みがある方も多くいると思いますが。

近松　かつては須弥壇収骨といいまして、いわゆる宗祖御真影の須弥壇のもとにお骨を収めるという意味ですね。それで、お骨の体数が年々増えてまいります。それに応じて年々床下のスペースを拡張しまして、現在は内陣いっぱいが収骨の空間ですので、須弥壇という名前がピッタリになってこないようになりまして、より正確さを求めて現在は真宗本廟収骨というふうに申し上げているということです。

受付をする保木所長（参拝接待所）

山内　ところで、わたしが門徒さんと接している中で、本山にお骨を収めても毎年たくさんの収骨があって、すぐに京都の山へ処分されるのではないかと心配される声を聞きますが、いかがでしょうか。

近松　そのようなご意見があることは、大変残念です。というのも、御影堂は２００３年から５カ年をかけて御修復されまして、収骨のスペースも広く設けられました。私はその工事に関わっていまして、その際、明治以降のすべてのお骨が収まっていることは確認しています。須弥壇収骨、本廟収骨にてお収めされたお骨が本廟以外の別のところに移されているということは、一切ありません。

山内　ありがとうございました。今度は保木所長にお聞きします。小松教区では昨年９月から収骨の代行を行っています。その経緯を説明いただけますか。

保木　小松教区ではご家族が亡くなると、お骨を三つに分けるという慣例があります。ひとつはお墓、ひとつは手次のお寺、そして本山です。例年、春に観光を兼ねて京都へお骨を収めるという方が多くいます。ところが、昨年の春以降新型コロナウイルスの感染によって、収骨の申し込みが激減しました。それによって相続講金の収納も減ってきました。これでは、法義相続・本廟護持の形が失われていくのではないかということも危惧されました。そして、門徒さんからも「お骨収めをしたいんだけれども行けない。どうしたらいいだろうか」という切実な声も寄せられていたんですね。

　そこで私たち教務所の職員が、ご遺族に代って大切な方のご遺骨を本山までお持ちしてお収めしてはどうかと思いついたわけですね。それを教区の役職者と協議をいたしまして、昨年の９月から始めさせていただきました。申し込みがたくさんあって、予想以上の反響がありました。

　昨年９月から今年の４月まで３２８体の収骨の申し込みがありまして、そのうち代行での申し込みは２８７体で、割合にしますと87パーセントです。「自分たちが行って収めたかったんだけど、代行があって本当にありがたい。気持ちもおさまりました」という声を多くお聞きしました。

【次号へつづく】

オンライン対談の様子（小松教務所）

【教区教化事業のご案内】

コロナ感染拡大に伴う対応等により急遽変更される場合があります

◇**十二日講**　毎月12日9時半～
【7月】加藤正現氏（勸正寺）
【8月】佐竹融氏（光玄寺）
※8月は全戦争犠牲者追弔法会と兼修

◇**日曜講座**
毎月1・3日曜9時半～
【7月】4日・18日
【8月】お休みです

◇**郡中御影報恩講**
7月23日午前中（一般参加なし）
会場　勸歸寺

◇**真宗入門講座**
7月30日（第2回）19時～
8月27日（第3回）19時～
《正信偈からのメッセージ》
参加費　各500円
※4月～5月は中止

◇**暁天講座**
8月1日5時半～
講師　近松誉氏
（本山本廟部長）
8月2日5時半～
講師　宮武真人氏
（四国教区光顯寺住職）
両日　本会場　小松教務所
中継会場　白峰真成寺

＊以上、会場の記載の無いものはすべて小松教務所（常盤会館）
＊詳細はお問い合わせ下さい

うららのお寺

稱名寺（しょうみょうじ）

～小松市西町～

春になると境内の桜が美しい稱名寺。鎌倉時代中期に源氏武士であった佐々木三郎盛綱が親鸞聖人の弟子になって出家し、能美郡赤井町に一寺を開創して稱名寺と号したことが起源とされている。その後、1632年に小松竜助町に移り、さらに1728年現在の西町に移転した。

前住職　佐々木五六（ごろく）氏の尽力により、1986年に納骨堂の新設と本堂の改修が行われた。そして、多くの方が集える大きな広間を有する現在の庫裡が2000年に完成し、今日の稱名寺の姿となった。

毎年恒例の「うらら市」は5月のお旅まつりに合わせて開催され、門徒さん達がいろいろなフリーマーケットを出店し、期間中には音楽ミニコンサートなどが開かれる。また、映画好きだった前住職が企画運営されていた映画の上映会が月に一回程度のペースで開かれたり、音楽のライブコンサートが開かれたりするなど、様々な企画で門徒さんだけでなく、地域の方など多くの方から親しまれてきた。

稱名寺を多くの方へ開かれた寺院として牽引してきた前住職がすい臓がんのために2020年3月に命終された。闘病中から寺族や法務員によって前住職の願いを受け継ぎ、6月に長男の佐々木祐（たすく）氏が22才の若さで新住職に就任された。「歴史あるこの稱名寺と仏法を未来につなげていくための努力を怠りたくない」と新住職としての意気込みを語られた。若くして住職という任に就き、不安を抱えながらも、ご門徒さんからの「お参りしてくれてありがとう」「これからもよろしくお願いします」の言葉に力をもらいながら、日々法務に励んでおられる。祐さんの「門徒さんの願いに応えながら、自分はどうしていきたいのか見つめていきたい」と話されていた。

郡中の小窓

まことに如来の御恩ということをばさたなくして、われもひとも、よしあしということのみもうしあえり。

『歎異抄』聖典P640

南無阿弥陀仏」は、苦楽に迷う者を必ず救うという阿弥陀仏の願いが込められた贈り物です。毎年夏休みには地域の子どもたちを対象にお参り会をしています。毎朝、本堂には子どもたちの南無阿弥陀仏の大きな声が響きます。それは仏様の願いが届いている姿です。

皆さんも心当たりがあると思いますが、大きくなればなるほどお念仏が称えられなくなるのはなぜでしょうか。贈られたこと自体に喜びがあるのに、何を貰った？」と、いつの間にか物の価値にすり替わっていませんか。たまに「南無阿弥陀仏称えて何になるんや」と聞かれることがあります。私たちは大人になるにつれて価値の世界を教え込まれていきます。お念仏に込められた仏様の願いが、何になるんや」という価値にすり替わったとたんに、私たちの口からお念仏が出なくなるのではないでしょうか。

去年の夏は新型コロナでお参り会を中止しましたが、今年は何とか子どもたちのお念仏の声にであいたいものです。

小松教区教学研究室
郡中学舎『研究員　柿原勧